

あなたをプラスの人生へと導く

しなんげ

4
2018



あなたの初めは小さくあっても
あなたの終りは非常に大きくなるであろう。
(ヨブ記 8:7)

純福音東京教会・出版部

〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町 2-2-19 Tel.03-3232-0067 Fax.03-3232-0729 www.fgtc.jp

Full Gospel Tokyo Church



CONTENTS

- 3 洞の中の歌 イ・ヨンファン牧師
- 4 ヨンサンコラム チョウ・ヨンギ牧師
 - ・救いの祝福
- 6 メッセージ 志垣重政牧師
 - ・奇跡を計画せよ
- 9 信仰の明文化を成し遂げますように㉕ イ・ヨンファン牧師
 - ・感謝は奇跡をつくりだす
- 14 十字架の檀上 カン・サン牧師
 - ・牛乳一杯の恵み
- 18 統一時代を開く ベン・トレイ牧師
 - ・なぜ血ですか？
- 24 我が人生のプラス
 - ・キングダム・カンパニーの経営と出入を主に委ねる
- 29 **企画** | 隠された憂鬱、「スマイルマスク症候群」
 - ・弱さを誇ろう／ファン・ウォンジュン院長
- 35 これが知りたい シン・ソンジョン牧師
 - ・ヨハネによる福音書 15 章で、主はなぜご自身をぶどうの木にたとえられただろうか？
- 37 光として塩として—— アン・ヒファン牧師
 - ・破壊し続ける存在ではなく、保護する存在であること
- 41 愛 イ・ジュンソク宣教師
 - ・花も風も雲も主を賛美します
- 46 かつての道、すなわち正しい道を捜し求めて——
 - ・悔い改めのない信仰は恵みがない／ソン・ヒョンギョン牧師

この「しなんげ」は、おもに韓国版信仰界 3 月号より抜粋して、翻訳し再構成したものです。
ちなみに、聖書の御言葉は「口語訳」を引用しています。

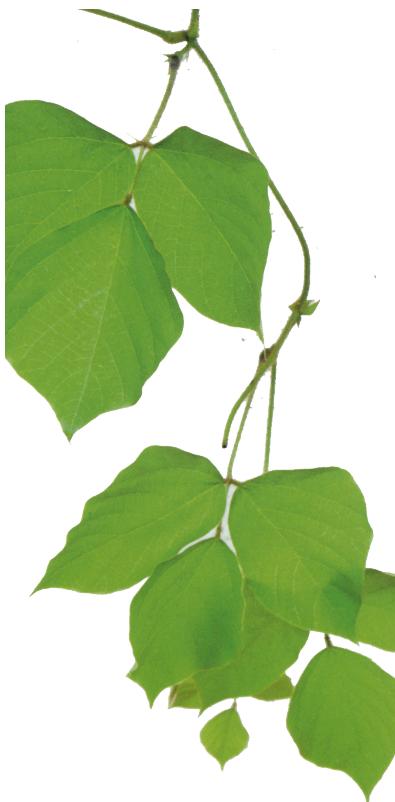


人生は平坦な道だけではありません。上り坂もあり、下り坂もあります。一方、「苦難の洞」も経験します。

環境よりもっとも重要なのは、人生に対する態度です。いくら苦難の時にあっても未来志向的な態度を堅持していれば、そこに祝福の動機を見出すことができます。しかし、すべてのことを「何か・誰かのせい」にして嘆き恨むのでは、大きな後悔しか待っていないのが人生の理なのです。

詩篇 57 篇は、ダビデが洞にいた時に歌ったものです。見出しには、「ダビデが洞にはいってサウルの手をのがれたときに」とあります。ダビデは絶望の洞の中で歌いました。洞とは、制限と拘束を象徴しています。しかしその暗闇の空間で、ダビデは賛美しました。特に 2 節では、「わたしはいと高き神に呼ばわります。わたしのためにすべての事をなしとげられる神に呼ばわります」と賛美します。素晴らしい信仰を告白する賛美です。彼は最後まで、未来志向的な絶対肯定の姿勢を貫いて生きました。

時代、社会、個人など、あらゆる種類の洞を人生で体験するたびに、宣言しましょう。私のためにすべてのことを成し遂げられる神の摂理を！ その宣言と歌が私たちの人生を変えるからです。†

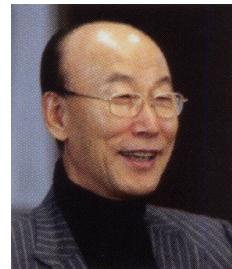


救いの祝福

エデンの園でアダムとエバが神様の命令に逆らって、不従順して罪を犯したゆえに、その子孫である私たちは、原罪を持って生まれました。私たちは罪のゆえに死ぬしかない存在として生まれましたが、イエス・キリストの福音を受け入れて信じるとき、その血潮によって私たちの靈は生かされます。これは私たちの全ての原罪が、キリストの血潮によって贖われたという意味であります。ローマへの手紙5章18節には、次のように記されています。

「このようなわけで、ひとりの罪過によってすべての人が罪に定められたように、ひとりの義なる行為によって、いのちを得させる義がすべての人に及ぶのである。」

人々がイエス・キリストの前に出て行くと原罪が赦され、罪も傷もなく義とされますが、世を生きて行くと日々様々な大きかれ小さかれ罪を再び犯します。それでは、このような罪はどのように対処すればいいでしょうか。ヨハネの手紙第1章9節には次のように書いてあります。



チョウ・ヨンギ 牧師
ヨイド純福音教会元老牧師

「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は眞実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。」

イエス様を信じて原罪が赦されて新しい命を得ましたが、日常生活で犯す様々な罪は悔い改めによってきよめられます。これはまさに私たちが外出から家に戻ってきたとき、足を洗うことと同じです。

イエス様は十字架につけられる前に、弟子たちと最後の過越の祭りを過ごし、弟子たちの足を洗われました。しかしひペテロは、「主よ、私の足を洗うことはできません」とお断りしました。その時、主は「私があなたを洗わないとあなたと私は関係がありません」とおっしゃいました。するとペテロは「主よ、私の足だけでなく、手と頭も洗ってください」と言って前に出ました。その時、主は次のように言われました。

「すでにからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。」

救われた者は再度救われる必要はありません。しかし足についたほこりと塵は洗い落とさなければなりません。足は日常生活の行為を指し、ほこりと塵は生活の中で犯す罪を指します。ですから、私たちは日常生活で犯した罪を1日1日、時ごと主にすべてを告白し、主の血潮によってきよめられ、聖靈に拠り頼み、再び罪を犯さないよう守って下さいと祈らなければなりません。†



奇跡を計画せよ

——マルコによる福音書 5章 25～34節——

さてここに、十二年間も長血をわざらっている女がいた。多くの医者にかかるつて、さんざん苦しめられ、その持ち物をみな費してしまったが、なんのかいもないばかりか、かえつてますます悪くなる一方であった。この女がイエスのことを聞いて、群衆の中にまぎれ込み、うしろから、み衣にさわった。それは、せめて、み衣にでもさわれば、なおしていただけるだろうと、思っていたからである。すると、血の元がすぐになかわき、女は病気がなおったことを、その身に感じた。イエスはすぐ、自分の内から力が出て行ったことに気づかれて、群衆の中で振り向き、「わたしの着物にさわったのはだれか」と言われた。そこで弟子たちが言った、「ごらんのとおり、群衆があなたに押し迫っていますのに、だれがさわったかと、おっしゃるのですか」。しかし、イエスはさわった者を見つけるとして、見まわしておられた。その女は自分の身に起つたことを知って、恐れおののきながら進み出て、みまえにひれ伏して、すべてありのままを申し上げた。イエスはその女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい。

神様にかたどつて創られた人間は、本能的に奇跡を願います。奇跡は、生きておられる神様の証しであり、絶望を希望へと変えてくださるからです。しかし、奇跡は偶然に生まれるわけではありません。奇跡を体験するための準備が必要なのです。それを本文の御言葉は教えてくれています。

第一に、福音によって、12年間の闘病生活の末、頼りの財産もなくなり、絶望の淵にあった女性の考えが変わりました。イエス様に会うことさえできれば、自分は癒されるという肯定的な想いを持つに至りました。ローマ人への手紙10章17節に、「したがつて、信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から來るのである」とあります。奇跡は、変化した心を通して起こされます。また、マタイによる福音書16章19節において主は、「わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」と語られました。考え（心）を変えてくれる福音を受け入れるためには、悔い改めが必要です。罪を悔い改めて義とせられ、過ちを悔い改めて正しきを受け入れ、不信仰を悔い改めて信仰を持ち、絶望と死の代わりに希望と生命を受け入れるのです。マタイによる福音書4章17節には、「悔い改めよ、天国は近づいた」とあります。天国が、私たちの考えを占領したとき、天国の奇跡が現われるのです。御言葉を聞かずに、奇跡を追い求めることの愚かさを悟り、御言葉を受け入れ、御言葉の上を堅く立って歩み、毎日のように奇跡を体験する聖徒の皆さんでありますように、主の御名によって祝福します。

第二に、夢と希望を持つようになりました。この女性は、癒されるという肯定的な想いと共に、もう一度家族と共に暮らせるという夢を持ちました。いつの間にか忘れていた夢をもう一度取り戻したのです。「夢のない民は滅びる」(箴言 29:18)、「若者は幻を見、老人は夢を見る」(使徒 2:17)——夢は、絶対的に必要なものなのです。奇跡を期待する夢を持つ人だけが、奇跡を体験します。それは、『御衣にさえ触れれば癒される』という肯定的な夢です。

第三に、考えが変わり、夢を持つと同時に、唇の告白が伴いました。希望に満ちた告白が、自分自身の人格を変えていきます。できないと思っていたことを、『出来る』と思うようになりました。これは、奇跡であり、喜びです。また、告白は、悪魔に対する防御壁になります。悪魔は一つの道から攻めてきて、七つの道から逃げ去ります。女性は、寝床から起き上がることすら困難な状態でしたが、考えと夢と信仰、そして告白が、彼女を奮い起こさせました。告白は、神様への信仰告白そのものです。『御衣にさえ触れることができれば、必ず癒される』という信仰告白なのです。体が極度に弱っていた女性は、最後の力を振り絞って寝床から起き上がり、ドアを開け、イエス様に近づいて行き、御衣に触れた瞬間、完全に癒されました。

愛する皆さん、『安心しなさい。あなたの信仰があなたを救った』とイエス様に言っていただける存在となり、大いなる奇跡を体験することができますように、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。†



「引退する時まで家庭訪問は続けていく」

3回目の家庭訪問は、80歳を越えた勧士様の家庭だった。その方はアパートで一人暮らしをされていた。頭金を2千万ウォン(日本円で約200万円)、月に6万ウォン(日本円で約6千円)の家賃だ。ご主人を天国へ送る時、入ってきた弔慰金で頭金を作って生活していた。息子はある地方都市で日雇い労働者として働いていた。時には月6万ウォンを支払うのが手に負えない状況だった。それでも関わらず勧士様の口からは続けて感謝が溢れ流れていた。

「勧士様、どうしてそんなに感謝だと思いますか?」

「天国に行った夫が頭金を備えてくれたのも感謝、孫が教会に熱心に出席することもどんなに感謝でしょうか。冬には暖かく、夏には涼しい家があることもどれほど感謝なのか。この

すべてのことが神様の恵みです。」

勧士様の感謝の項目は、とても具体的だった。抽象的な感謝ではなかった。たとえ暮らしが暗かろうと、その生活の中で小さなことへの具体的な感謝の祈りを捧げていた。これが信仰の力、これが祈りの力だ。この日、感謝の心が本当に回復したのは、私自身だった。勧士様の生活と信仰によって大きな感動の波が私に押し寄せた。

感謝があふれる家庭は子孫が祝福を受ける

1620年12月26日英國を出発した102名の清教徒たちは米国のプリマスという海辺に到着した。清教徒たちは180トンのメイフラワー号に体を乗せたまま、信仰の自由を求めて117日間航海をした。旅の途中2名が亡くなり、1人の子どもが産まれた。清教徒たちは自身らに農業を教えてくれたインディアンたちを招待し、感謝礼拝を捧げた。これが初めての収穫感謝祭だ。

南米は北米より良い自然環境を持つ。しかし、米国は世界最高ではあるが、南米は依然として疾病と飢餓に苦しんでいる。歴史学者らはその原因を次のように説明する。

北米は清教徒たちが信仰の自由を求めて開拓した「感謝の地」だ。しかし南米は一攫千金を狙う人々が開拓した「欲望の地」だ。北米と南米の生活水準に格段の差が生まれることはあまりにも当然のことだ、と。

家庭も同様だ。感謝があふれる家庭は子孫たちまで祝福される。自己の利益だけを追求する利己的な家庭の子孫たちは生涯、欲と貧困から離れられない。

私は3家庭を家庭訪問し、多くの恵みを受けた。純福音の野

性を持つ信者らに会い、福音の偉大さを再確認した。そして、心からこのような決断をした。

「なぜ私は今まで忙しいという理由で聖徒のこのような現状をよく見ていなかったのか。引退するその日までひと月に一度は最も困難な環境の中でも信仰を守り生きている『純福音の勇士たち』の家庭を訪問する。」

イエス様は生涯、低い者として仕えておられた。私もそのような人生を生きていかなければならない。大きな教会の牧会者は、初代教会の信仰を見落としがちだ。初代教会の靈性を回復するため、高慢な心を追い出すためにも、低く疎外された信者たちの人生を真摯に受け入れなければならない。真なる祝福とは何か。受けることではない。真なる祝福は「仕えること」と「分かち合う」ことだ。今は牧会のパラダイムを「個人の救い」から「社会の救い」に転換しなければならない。では、社会の救いとは何か。それは巨大なスローガンではない。教会が小さな愛を実践することから社会の救いと社会改革が始まるのだ。

「低いものの友となってください」

私は大学生時代ソウルのナンジドという場所で撤去民が住む村で1週間ボランティア活動をしたことがある。マンウォンドンバスの終点で降り、30分ほど歩いた所にその村はある。その当時、終点の停留所には最高級の洋館が立ち並ぶ場所だったが、30分歩いていった畔の向かい側にはソウルで最も劣悪な環境下に住む撤去民の村があった。同じ都市、同じ空の下であまりにも対照的な状況だった。

その村の反対側には、ソウル市糞尿処理場があった。ソウルのすべての汚物がそこに捨てられた。まともに呼吸をするのも

辛い悪臭、蠅と蚊の襲撃、熾烈な生活の激戦地だった。黒い油紙で屋根を作り、風に飛ばされないようその上に石を乗せ、高さ1mを少し超えるほどの無許可の家に住む人々。腰を曲げなければ入れない場所に電気、水道は無く、ろうそくの火が灯され、井戸から汲む汚い水を飲料水として使っていた。

子どもたちは出て行ってすり、くず拾い、靴磨きなどでお金を稼ぎ、大人たちは道路工事の道に砂利を敷く仕事で日当3～4千ウォン（日本円で約3～400円）を貰い、骨が折れる苦労をし、日々を暮らしていた。社会の底で力を尽くして生きてきた人々がその場所で集まり新しい人生を開拓していたのだ。その時、心の奥底から大きな悟りが与えられた。

「教会は貧しい人、病の人、疎外された人、圧制される人のため存在しなければならない。教会はナンジドに住む貧者の慰め人にならなければならない。」

ナンジドの強力な絵がいつも私の脳裏で消されることはなかった。私が苦しみの中にいる信者たちのため、家庭訪問を続けることも、若い時代にナンジドの撤去民の村で強力に感じたことがひとつの中因となっている。

私になぜ苦難がないだろうか。私は苦難のたびに早天の祈りで逆境を克服してきた。牧会者は少し寂しくなければならない。寂しいからこそ主を見上げ祈ることができる。私は寂しい時、いつも歌う賛美がある。私はこの賛美を私の牧会歌と呼ぶ。

＜聖歌 611 番＞

「わが友にますあがないぬし / イエスキミの麗しさは /
谷間の百合か明けの星か / くらべうるものはあらじ /

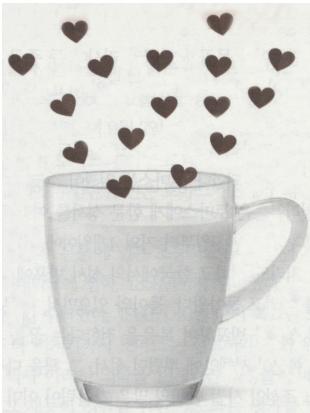


悩める時のちかきたすけ 悲しき日のなぐさめ /
きみは明けの星 / 谷間の百合 / くらべうるものはあらじ (1節)

きみはわが罪あらいきよめ / いざないにもうちかたせ /
高くそびゆるとりでのごと / みちからもてまもりたもう /
あたはせめよせ / 世はすつれど / いかでおじまどうべき /
きみは明けの星 / 谷間の百合 / くらべうるものはあらじ (2節)

私はこのような仕える心を、祖父イ・ウォングン長老から受け継いだ。祖父はラクダのこぶのような膝を持つ人だ。祖父が天国へ行かれる時、膝がかたい肉で覆われるのを見た。どれほど偉大な祈りの人生だろうか。私はこのような祖父に出会ったことを誇りに思い、感謝する。信仰の家系に生まれ育ったことがどれだけ大きな祝福なのか。その信仰の遺産のゆえ私たち家族は皆イエスを信じるようになった。

私たちは皆、信仰の明文化をつくるよう祈るべきだ。子どもに何を遺してあげたいのか。お金？名誉？それは時々紛争の火種となる。そして、一瞬で飛んでなくなってしまう。最高の遺産は「良い信仰」だ。それは決して無くならない偉大な遺産だ。皆様が、この信仰の明文化を作る始祖となることを願う。†



牛乳一杯の恵み

私は大学に行くために「学力考査」と「数学能力評価」をすべて受けた時代の人間です。浪人生活など計画にはありませんでした。学力考査を通して望む大学に入って勉強していましたが、そんな私を主は神学校に召されたので、しょうがなく数学能力評価の準備をしていました。そういうわけで私の浪人生活はいきなり始まったのです。

当時、家庭の経済的状況がとても苦しかったので、朝から夕方までは働いて、その後に新設洞（シンソルトン）にある入試総合塾で夜遅くまで、ほぼ毎日6時間勉強し続けました。そんな感じで一週間を過ごすと、極度の疲労に襲われます。それでも主日は、もっと遠くまで移動しなければなりませんでした。

ソウル城東区紫陽洞にある家から恩平区新砂洞の上り坂にある教会まで、毎主日2時間かけて電車とバスを乗り継いで通いました。もちろん主日だけではなく、平日でも教会のイベントや集いに参加するために、その長距離を往復することもありました。私がこの遠い道のりをあきらめずに通ったことには理由があります。主のしもべとして働いていた親に連れられて、引っ越しと転校を何度もしているので、好きな人たちとの別れが繰り返されるのがあまりにもつらかったです。

引っ越しをして住む場所が変わり転校をすることはどうにもならないことですが、教会はいくら遠くても引っ越しと転校がないので、決断してそこまで行くか行かないかは、徹底的な意思と献身さえあれば可能なことでした。結果的に私は浪人をした時から入隊するまで、遠い道のりを行き来しながら、10代、20代を一つの教会で信仰生活を送ることができました。今思えば、その何年間は辛くて苦しい日々だったにもかかわらず、病気や事故もなく、一つの教会で信仰生活を送ることができたのは、主の恵みであり導きであったことに感謝しています。

その教会とは特別な縁がありました。父と別れてつらい時、高校時代から共に讃美し、共に祈った仲の良い青年たちがいて、私が初めて教えた教会学校の弟子たちも私を待っていたからです。主日学校の礼拝は朝9時に始まりますが、1時間前の8時には聖歌隊の練習をしなければならなかったです。

当時の私は、主日学校の聖歌隊を担当していたので、それよりもっと早く教会に着きました。毎週主日、朝5時に起きて準備をし、紫陽洞から出発するシャトルバスで駅まで行き、電車に乗れば、7時半くらいには新砂洞のシャトルバス停留所に着くことができます。ちょうどここに小さなパン屋さんがありました。お店の名前は覚えてないですが、主日の朝早い時間にお店から漂ってくる焼き立てのパンの香りは、世の中で一番香ばしい香りのようでした。

素直になればと願います

私は主日に朝食を摂る時間などなかったので、たまにその店で一番安いパンを一つ買って食べました。小さな店の中には朝

焼いたばかりのパンが並べてあって、片隅には何人か腰かけて食べられる空間がありました。時間がない日は、パンを買って教会までの坂道を歩きながら食べましたが、ひどく寒い日や時間の余裕がある日は、パン屋の隅で食べて行ったりもしました。そんな感じで私がパンを食べていると、パン屋の主人と思われるおばさんが寄って来ていつもこう聞きます。

「牛乳一杯飲みます？」

しかし、私はお金がなかったので毎回遠慮しました。実は、いい気分になれない時もありました。お金もないのに牛乳まで売ろうとしていると思ったからです。

そして、遂にあの長い道のりをとう最後の日になりました。入隊前の最後の主日でした。その日も同じように朝早く起きてバスと電車とシャトルバスを乗り継いで、新砂洞に降りました。このパン屋も最後だと思いつつ、店に入ってパンを選びました。いつものようにおばさんは私に「牛乳一杯飲みます？」と訊きました。その日は最後だからといって、母がおこずかいを上乗せしてくれたことを覚えています。そして、最後だという寂しさで、私はおばさんに「はい！今日は牛乳もください」と言いました。牛乳と一緒に食べるパンはもっと美味しかったです。くだらないことかも知れないけど、幸せを感じました。

簡単だけどおいしい朝食を終えて会計をしようしたら、おばさんはパンの代金だけを受け取りました。分かったことは、始めからおばさんは牛乳をただあげるつもりで、ずっと聞いていたのです。主日の早い時間に、一人で飲み物もなくパンを食べる私に優しい手を差し伸ばしていたのに、私はそれを誤解して断っていたのです。一度二度ではなく、その二年間ずっとでした。パンの代金だけを払って店を出る瞬間、何とも言えな

い後ろめたさと感謝が混ざって、私の胸は熱くなっていました。

結局、問題は『私』自身です。親や環境や状況ではありません。徹底的に『私』の問題なのです。私が曲がっているから、すべてが曲がって見えるのです。私の傷が癒されていないから、すべてが棘のあるように聞こえ、私の心が汚いから、すべてが憎たらしく見えます。私のかたくなな心が変われば、辛い日々も感謝できます。私のきつい目が柔らかくなれば、暗い所でも光を見つけられます。だからこそ、主が私たちになさろうすることは、いつも『私』を変えることです。

この記事を読む誰かが「私にはそのような恵みの牛乳はなかった」と、つぶやくかも知れません。そんなはずはありません。毎日昇る朝日が、その牛乳一杯です。夜明けの時間に、私のためにバスを運転する運転士さんが、牛乳一杯です。雪が積もって真っ白な朝、私より先に起きて雪がきをする人が、牛乳一杯です。有名レストランのような美味しいさじやなくても、毎日食卓に乗せられる母の料理が、まさに牛乳一杯です。いつもひとりで忙しくする中、たまに送られてくる信仰の家族からのメッセージ、今日読む短い御言葉から得られる恵みも、牛乳一杯です。そして、何よりも私を愛して下さり、今日も言葉に表わせない切なるうめきをもってとりなしてくださる聖霊様と、祈りのとりなしがその牛乳一杯です。

より大事なことは、今までもらってばかりであった牛乳一杯ではなく、私が誰かのために分けて上げられる牛乳一杯にしたいと願います。新しい春が訪れる3月、凍り付いた誰かの心に福音の春が訪れるよう、私たちはそうして一粒の麦になりたいと願っています。†

なぜ血ですか？



先月、コラムの最後は「なぜ血ですか？」でした。特に創世記17章に書かれた、神とアブラハムの契約のしとして割礼の血について言及しました。これから、人類と結んだ神の御契約等を学びながら、すべてにおいて血が非常に重要である理由を分かち合いましょう。

創世記に書かれた契約の最初のシャイン、虹そのものに血があるのではないが、血が命のゆえに血を表していると見なすことができます。もはや水によって命を滅ぼすことはないという神とノアの契約は、洪水によって死んでいった人々の命の前で新しく造られました。そこに直接的な関連があります。洪水の直後に、神はノアと彼の子たちを祝福されるところから見出せます。「すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう。さきに青草をあなたがたに与えたように、わたしはこれらのものを皆あなたがたに与える。しかし肉を、その命である血のままで、食べてはならない」(創世記9:3～4)。ようやく神は人間に肉を食べることをお許しになりましたが、血のままで食べてはないと仰せられました。なぜなら、血が動物の命のゆえ、その命は神から来るものであり、神に属しているからです。だから、「水のように地に注がなければならない」と命じられたのです。

「しかし、あなたの神、主が賜わる恵みにしたがって、すべて

心に好む獸を、どの町ででも殺して、その肉を食べることができる。すなわち、かもしかや雄じかの肉と同様にそれを、汚れた人も、清い人も、食べることができる。ただし、その血は食べてはならない。水のようにそれを地に注がなければなければならない。」(申命記12:15～16)

「ただ堅く慎んで、その血を食べないようにしなければならない。血は命だからである。その命を肉と一緒に食べてはならない。あなたはそれを食べてはならない。水のようにそれを地に注がなければならない。あなたはそれを食べてはならない。こうして、主が正しいと見られる事を行うならば、あなたにも後の子孫にも、さいわいがあるであろう。」(申命記12:23～25)

「町の内でそれを食べなければならない。汚れた人も、清い人も、かもしかや、雄じかと同様にそれを食べることができる。ただし、その血は食べてはならない。水のようにそれを地にそそがなければならない。」(申命記15:22～23)

上記の箇所に書かれた「汚れた人も、清い人も」とは、儀式に基づいて清い、もしくはあらゆる理由によって汚れた人を意味するという事実です。肉を食べることはすべての人に許可されています。ただ一つ強力な禁止事項は、血をそのままで食べることです。なぜなら、その血が命であり、命は創造主なる神からきたものであり、その生を与えてくださった神に属しているからです。それゆえ、血は命を代表します。聖書全体において、これが『真理』です。ですが、これが契約のしとどういう関連があるのでしょうか？

エデンの園に戻ってみましょう。創世記3章に、蛇がエバを

誘惑する場面が出てきます。エバはその誘惑に陥り、禁じられた実を食べました。そして、自分の夫アダムにも一部渡しました。アダムはそれを食べました。主なる神は、彼らに善悪を知る木の実を食べると死ぬであろう、と仰せられました。——「しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取つて食べると、きっと死ぬであろう。」(創世記 2:17)

しかし蛇は、その実を食べると完全に死なないという事実を知っていました。だから彼らに死なないはずだと言ったのです。ヨハネによる福音書 8 章 44 節に、イエス様は、サタンを「あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいでいるのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ」と呼ばされました。巧妙な偽り者のように、サタンという蛇は真実を半分しか言いません。偽りの言葉で、エバを死に至る実を食べるようにさせることによって、サタンはエバを殺害しました。サタンはエバがすぐに地に落ちて命を失わないことを知っていました。しかし、エバが神に不従順した瞬間、死の過程が始まるという事実も知っていました。しかし、彼女の夫アダムに、エバの姿は大丈夫であるかのように、生きているかのように、死なないかのように見せかけました。

最初の血を流すこと

神に不従順してすぐに、アダムとエバはもはや神の臨在のうちにとどまれないことを知りました。もはや彼らは、堕落し汚

れた存在となりました。神は、完全に聖いお方です。この二つは決して共に存在することができません。だから彼は、自身が裸であることを知り隠したのです。そして神から隠れました。アダムとエバは、神の聖さと彼らの不従順の結果から自分たちを保護するために、彼らと神との間に何か隠すものが必要だと知りました。問題は自分たちを隠すために探し出した唯一のものが、木の葉だったことです。もちろん、神は彼らを見ておられました。いかなるものも神の御目から隠れることはできません。彼らの罪の結果について語られた後、神は彼らの裸を隠せる、神の聖さと彼らの罪の間に『皮の衣』を与えてくださいました。

「主なる神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた」(創世記 3:21)。一度考えてみてください。神が『皮の衣』をいかにして得られたのでしょうか? それは、どういうことが起きてこそ得られるのでしょうか? 神は、アダムとエバのために皮の衣を作るため、動物を 1 頭屠られなければなりませんでした。これが、聖書に記録されている最初の血を流すことです。アダムとエバが、彼らにとって致命的な神の聖さから自身の命を守るためには、動物 1 頭が死んで血を流さなければなりませんでした。もはや彼らの命は喪失してしまいました。ですが、神はそこで終わりにされたのではありません。究極的に人類が再び神との関係に、神の臨在の中に戻れるための過程を始められたのです。その過程は、『血を流すこと』から始まりました。血は命です。一つの命と交換するためには、別の命が必要です。血を流す必要があるということです。

この瞬間から、神は人間と契約なさるたびに、血を流すことを要求されました。これは契約が非常に厳肅で、命と死の契約であることを明確にします。決して軽んじてはなりません。

今まで私たちは、ノア及び洪水以降に残されたすべての生命たちと結ばれた神の契約を見てきました。創世記 15、16 章に書かれたアブラハムと神が結ばれた契約、割礼の契約も学びました。また、モーセの妻チッポラが息子たちに割礼を行なう前に、神がモーセをおびやかされたこともわかりました。出エジプト記をより詳しく学んでいくつもりですが、その前に創世記 22 章の物語、神がアブラハムに契約の子イサクを供え物として捧げなさいと命じられた部分を見てみましょう。アブラハムが神の仰せのとおりに従う準備ができていると認められた時、——（年老いたユダヤ人ラビは、アブラハムの刀が実際にイサクの皮膚を切ったと、その皮膚から血が流れたと言います）——神は直ちに小羊をもってイサクの代用とされました。そして、アブラハムの子孫は祝福され繁栄するようになるであろう、と約束されます。もう一度神の御約束に核印を押すために血が流されました。

この部分を詳しく見るために、過越の祭の日に、エジプトの奴隸生活から脱出するイスラエルの話に戻ってみましょう。モーセがすべきことを、代わりに息子たちに割礼を行なったチッポラの行動によって、神との契約を完成することができたモーセは、エジプトに渡ってパラオと対面し、イスラエルの民を奴隸状態から解放させることを要求します。出エジプト記の最初の部分を読むと、パラオがこの要求を拒んだために、神は災いを下されます。出エジプト記 11 章に、神は最後の災い——人であれ獸であれ、エジプトのすべての長子の死——を宣言される場面が出てきます。12 章では、神はイスラエルの民がすべきことを説明し、エジプト人に下される災い——死——から、イスラエルの民をどのように保護されるかについて仰せられます。イ

スラエルの民は小羊を屠り、その血を家の入口の二つの柱とかもしに塗らなければなりませんでした。

「その夜わたしはエジプトの国を巡って、エジプトの国におる人と獸との、すべてのういごを打ち、またエジプトのすべての神々に審判を行うであろう。わたしは主である。その血はあなたがたのおる家々で、あなたがたのために、しるしとなり、わたしはその血を見て、あなたがたの所を過ぎ越すであろう。わたしがエジプトの国を擊つ時、災が臨んで、あなたがたを滅ぼすことはないであろう。」（出エジプト 12:12～13）

このご命令の驚くべき点は、誰でも望む人は死の使いがエジプトの地を通る際、過越の祭の小羊の血の下に、イスラエル民族の家の中に入つて行って命を救うことができるという事実です。アダムとエバの体を覆つた皮の衣のような、割礼の血のような小羊の血は、そのしるしを望む人々と神の御怒りの間に『隠れ幕』となってくれました。同章 38 節を読んでみると、『多くの入り混じった群衆』——イスラエルとイスラエルではない人々——が、その晩にエジプトから共に出てきたとなっています。この言葉はモーセの言葉を心に刻み、過越の祭の小羊の血による救済を信じた人々——エジプトの人々もいたはずだし、他の外国人もいたはずです——これは人々が多かったことを意味します。

次回は、この「多くの入り混じった群衆」がシナイ山で神の御前に立つて新しい国となるとき、どのようなことが起きるかを学んでいきましょう。そして、再び神と御民の間の契約のしるしと、神が人間と結んだ最後の契約のしるしとして形象化されたことを見ていきましょう。†



キングダム・カンパニー の経営と出入を 主に委ねる

アン・ウンジョン
大学路ソウル眼科院長
CBMC江南支部清友会会长

私は母胎信仰として生まれ子供の頃から、それなりに着実な信仰生活を自分は送ってきたと信じていた。誠実なタイプのため、学校や教会でも無難な学生時代を過ごした。また、子供の頃から、アフリカの医療宣教の夢を持っていたので、自然に進路も医学を勉強することに決めて着実に歩んできた。優しい性格の小児科医である夫に出会い結婚して、息子も産まれた。30代半ばには、大学路（ソウル・テハンノ）に眼科を開院するようになった。丁度、その頃レーシック・ラセック手術ブームが起きた時期でお金もたくさん稼ぐようになった。

しかし、私は幸せではなかった。教会に通い、お金もたくさん稼いでいれば、当然幸せになるのだと思っていたが、実際にはそうではなかった。肉体は疲労し、靈的にも理由のない空虚さが胸に押し寄せてきた。一言でいえば、生きていくのが退屈で楽しみもなかった。

そして四十になる頃、「このままでは、ダメだ。」と結論を下し早天礼拝に行き始めた。それまでの自分には考え付かないことだった。早天の祈りは、目まぐるしく忙しい生活に疲れてい

る自分には一生実践できないことの一つと挙げられた課題だった。しかし、今後、どのように生きて行かなければならないか、またどのように病院を運営していかなければならないのか、途方に暮れていく中、それは可能になったのだ。

早天礼拝を通して説教を聞いている中、「終末の時にどのように生きるべきか」という弟子たちの質問に、主がたとえで語られたマタイの福音書25章の御言葉が私の心に大きく響いた。いつも目を覚ましていなさいという「十人の乙女のたとえ」、与えられた環境で最善を尽くせという「タラントたとえ」、隣人愛の実践を強調した「羊とやぎのたとえ」を通し、今後どのように生きるべきかについての明確な答えを見つけることができた。「はい。イエスを信じています」という言葉だけでは、世界はもちろん、主の御前でも認められないということを悟るようになったのだ。

以来、私は御言葉の実践の第一歩として、病院の広報広告をすべて中止した。その当時、少なくないお金を病院広報に投資してきたので、患者の減少も覚悟して決断を下した。また、手術の質的向上のために、一日の手術の回数も制限し誠実納税を実践した。「この病院のすべての経営との出入りを完全に主に任せること」という決断を主に見せたかったし一つ一つこれを実践に移した。そして病院の広報費用は宣教後援に転換した。当然その後病院の売上高は減少した。しかし、この世の方法ではなく、神の国の方で、新たに経営しながら私と病院は驚くべきビジョンと恵みを体験することができた。手術も原則通りでなければならないかのように病院の経営も変則的ではなく、原則通り経営しようと努力した。最初は原則を守ることが難しく、高コストであるように思えたが、長期的には、最も早い近道であり、

安価な方法だと言うことも経験した。生活中でも聖書の原則に沿って、祈りの答えに沿って決断し行動するのが最も良い結果をもたらすことができる、という確信と信仰を持つようになった。

時には、楽で簡単な世の中の方法に進みたい時もあったが、サタンに隙を与えないようにしなさいという御言葉を掘んで努力して進んだ。このようにしていたため私に理解できない状況が起るときでさえ、神様は常に良いものを愛する子供たち与えられる、まことの父なる神様の深い愛を体験することもできた。

ある手術中のことである。普段は、その手術が無事に終わるように、手術の結果だけを祈るのだがその日は、最初に魂の救いのために祈る思いが与えられた。「神様、この患者の肉の目だけでなく、靈の目も治しくださって、イエス様と出会い信じるようにしてください。」切な祈りが出た。ところが、祈り終えた途端に、突然手術の機械が理由もなく止まってしまうではないか。びっくり驚き戸惑った瞬間、これが恐ろしい精神的な攻撃であることを悟った。慌てふためきながら前後の機械を操作する私の頭の上に、突然、その日の朝読んだ「悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、あなたがたから逃げ去るであろう」ヤコブ4章7節の御言葉が浮かんだ。慌てた気持ちから落ち着きを取り戻し、大胆にイエスの御名によって悪魔に立ち向かう祈りを始めた。すると、何事もなかったかのように機械は再び正常に動きはじめた。

この出来事が私の医療の働きにとって重要な転換点となった。イエスの御名の権勢がどれほど大きく、驚くべきか、その御名の御前に万物が服従し、その御名を悪の勢力がどれほど嫌い、恐れるのかを深く悟るようになった。以来、患者の救いのため

に大胆に祈る靈的成長が起きるようになった。

今年で開院18年目となる私に、主は数年前から宣教病院としての新しいビジョンを与えられた。現状で収まりたいと思った私に主は、さらに大きな課題をくださり、そのために祈るようになり、具体的に準備をさせた。専門性と靈性を備えたキングダムカンパニー（聖書の原理で、神様が経営される企業）としての訓練が始まったのだ。現在、眼科領域の特許開発と研究が進行中であり、このすべてのことが唯一神の御国と御働きのために用いられる尊い御業であるように。また、統一があれば北朝鮮に眼科宣教病院を建てることを期待して祈っている。肉の目だけでなく、靈の目も一緒にいやされる「光」と「福音」を彼らにプレゼントできることを毎日祈っている。

これは過去私が幼い頃から漠然と抱いていたアフリカの医療宣教師になる願いではとどまらず、具体的な医療宣教の実践方向を実現してくださったソ・ウギョン教授（韓国コーチング振興院院長）のコーチングのおかげでもある。彼を通して信仰の情熱だけをもってアフリカに行くことが果たして本当に主が私に願っておられることなのかを新たに確認する時間を持つことができた。まず、小さな事に忠実して器が準備されるとき、神様はその次に大きな事を神の時に任せられるのだという神の摂理、神の国の経営方法を悟るようになった。

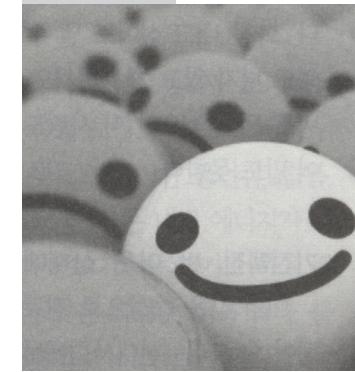
4年前からCBMC（韓国キリスト実業人宣教会）江南支部に参加し毎週木曜日の朝、聖書（ガンヨンギュ牧師）を学び、キリスト教実業人たちと交わり、靈的な成長を経験している。昨年はCBMC全国大会に出席してこれから直面することになる時代の変化と靈的な困難の中で、どのように対処して進むべきかを学ぶことができた。ヨルダン川を渡って、本格的な戦争を控えているヨ

▼イ・ヨンフン牧師（中央）
ソ・ウギョン教授（左）と一緒に



シュアとイスラエルの民に神が求めていることは、まさに「自分を聖めなさい」ということだった。いつ、どこでも最も重要なことは、「明日何をするか」ではなく、「今日、今この瞬間、神の御前にすぐに立ちなさい」ということである。神様が願っておられるのは今日、この病院を訪れる患者に最善の診療で治療し、彼らに福音を伝えること、つまり今ここで「神の国」を先になすことが、神様が喜ばれるという確信を持つようになった。

厳しい世の中を生きていると使命を知りながらも実践できない場合が多い。自らクリスチャンであることを隠したり、捨てたい場合もある。私もそのような葛藤を経験してきた。しかし、私たちが、この世の方法ではなく、神の方法を選択する時に、世の中ではありえない能力の人、神様に用いられる眞の光の子として建てられることを、私は過ぎた時間の中で明らかに悟った。現実には、難しいですが、すでに勝利したイエス・キリストを目標としてめざして走るその道だけが私の人生の希望です。今日も私たちの人生で行われる神の驚く奇跡と恵みを期待し感謝します。†



弱さを誇ろう

ファン・ウォンジュン 院長
ファン・ウォンジュン精神健康医学科医院、
韓国精神健康研究所所長

「もし誇らねばならないのなら、わたしは自分の弱さを誇ろう。」（IIコリント 11:30）

普通の体格で綺麗な顔の25歳の職場女性。無気力でいつも憂鬱だと、生きたいと思うけれども、この無気力感に自分が蝕まれるような気がすると、診察室に来院してきた。特に職場や家庭で受けるストレスもなく、性格的に楽天的で、自身がやっていることに、基本的に完璧でなければならなかった。相手が自分を見つめている期待感によって行動するようになり、また失望させたくもなかった。青少年時代にも学校の班長の役割を誠実に遂行してきたし、リーダーシップのある姿を見せるために、常に何かを見せていましたし、いつも明るく、朗らかで責任感に満ちていた。家でも職場でも雰囲気づくりの役割を果たしてきた。今25歳だが、幼稚園の子どものように父の前で踊り、父を笑わせている。今思えば、内心を隠していたかもしれない。

しかし、昨年の夏から少しづつ変わり始め、最近1カ月前から、もはや踏ん張りが利かず、無気力になっているのに休むことが

できないでいる。常に何かをしなければと思い、何かをしようとする。職場では、年配の方が多く、若い自分がやらなければと思い、周囲の評価を意識しつつ行動するようになる。こうして自ら自分を束縛し、自由になれないようになるのである。朝目覚めると、一日に対する期待感もなく、生きている感じもせず、生きるべき理由もない。ただ息を吸っているだけで、このまま生きていいだろうか。自殺という恐ろしいことも考えるようになる。怒りたいけど怒ることもできず、鳩尾の痛みもあって、眠れずに夜を明かすこともしばしば。たくさんの夢を見るけれど、何も思い出せず、どうもすっきりしない。自分の辛さを誰かに話したいけれども、「私の悩みを打ち明ければ、あの人も苦しむようになる」と、自分の悩みで負担をかけたくないと思い打ち明けることもできない。

疲労困憊（ひろうこんぱい）、バーンアウト状態に至ることも

こういう症状で診療所を訪ねる患者が増えている。感性経営、感性マーケティングが要求される現代社会で、いわゆる「感情労働者」たちによく現れる、「スマイルマスク症候群（Smile Mask Syndrome）」という社会的心理現象だ。正直な感情を表現できずに、外見上はいつも笑っているが、内側は憂鬱や無気力感のような、不安定な心理状態を経験する症状を称する。日本大阪樟蔭女子大学の夏目誠教授によって初めて使われた用語として、感じる感情とは異なり、「いつも笑わなければ」という状況に処することによって感じる心理的不安定感を意味する。コールセンター相談員のように、サービス業に従事する感情労働者、対人関係問題の苦しみ、過度な業務ストレスなどを経験する人

たちからよく見られる症状として知られている。

精神医学的には仮面性憂鬱（Masked Depression）と類似している症状だ。仮面性憂鬱は、感情は隠されて他の症状だけが目立つ特徴を持っている。前で言及したように、典型的な憂鬱の症状は見えずに、他の疾患に診断すべきだと思わせるように現れるため、仮面性憂鬱というのである。身体症状や問題行動などに見え、感情を表現することができないため、「感情言語表現不能症（alexithymia）とも呼ばれる。否定的であり肯定的であり、また感情的であれ、意識の外に表出すべきであるが、無意識的に抑圧されて自身の感情を感じたり表現したりができないのである。

仮面性憂鬱は、憂鬱症状が年齢層によって感情ではなく、他の様相として現われることもある。このときに現われる症状としては、多様な身体症状、これに対する執着や健康心配症、攻撃性、反社会的行動、アルコールや他の薬物乱用等だ。しかし、仮面症憂鬱とは違って、スマイルマスク症候群は、内面の暗い多様な憂鬱症状を、意図的に抑えて外に現われないようにし、顔の表情や体の動作は明るく、笑顔を見せながら楽しいふりをしなければならない。

このときに現われる症状は、症状が悪化される時期によって異なるが、初期にはそれでも顧客、職場の上司や同僚たちに明るい笑顔を見せることができるし、そうしようと非常に努力する。だから、そうしなければならないという強迫的思考や行動によって、ひどい不安感、悲痛、刺激過眠症、敏感、憤怒感を現わすようになる。明るく見せかけて生きる内側のエネルギーが徐々に枯渇していき、自ら感情の統制が難しくなり、憤りが

表出される。と同時に、挫折感、無能感、無気力感、食欲と性欲と意欲低下、絶望感、頻繁に襲われる懷疑心、過食、不眠症または睡眠過多症、より悪化すると自殺思考及び自殺試図にまで至らせる。

前に現われた事例のように、自分がそれでも我慢して明るく笑顔を見せられる意地と努力する力があるときは、それほど問題はない。しかし、その力を使い果たしてしまい、もはや耐えられずに他人に明るい姿を見せられなくなると、他人に見せなかつた本心、本当の姿を見せるしかなくなる。そうすると、ひどい無気力感に陥るようになる。アスファルトの上の水に濡れた落葉のように、車が通り過ぎてもそこから離れられないほどの疲労困憊（ひろうこんぱい）、バーンアウト（Burn out）状態に陥る。

外来診療中に、水中バレーを比喩に説明したりもする。水の中から美しい姿を現わす場面の中で、カメラがしばらく水の中を映してくれるときがある。どうだろうか？ 水面の上の美しい姿を見せるために、水面の下で、ものすごく体の振り付けや足の振り付けをしていく様子を観た。競技が終えて出てくる水中バレー選手の表情をカメラがとらえる。荒い息を吐きながら、呼吸を整えながら点数を待つ。競技時間は、年齢と種目に従つて2分から最大5分だ。もしこれ以上だったらどうなるだろうか？

ニコデモの悩み

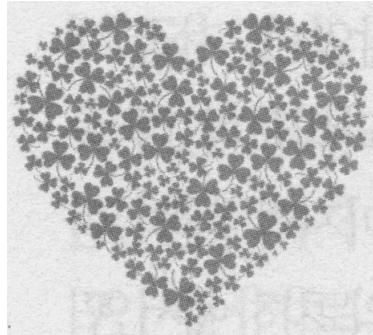
聖書からみたスマイルマスク症候群は、ニコデモの悩みから

見出すことができる（ヨハネ3章参照）。聖書をみると、人々に良く見せるために、常に大丈夫かのように自分を包装していた人たちの部類が登場する。それはパリサイ人だ。イエス様は彼らの姿を多様に指摘しておられる。彼らは、祈る時も人に良く見せたいがゆえに、会堂と大通りのつじに立って祈ることを好み、くどくどと長く祈ることによって、自分たちの敬虔さを示そうとした（マタイ6:5～7）。また彼らは、救済するときも人々に褒められるために、会堂や町の中でラッパを吹きながらしていた（マタイ6:2）。イエス様は彼らの姿について、外側と内側が違っていると示され、「白く塗った墓」（マタイ23:27）、「人目につかない墓」（ルカ11:44）という表現をなさつた。

ヨハネによる福音書3章をみると、パリサイ人であるニコデモが、夜に主イエスを訪ねて来て、自身の内面の葛藤について尋ねる場面が書かれている。外からはパリサイ人として、信仰的にはすべてに満たされているかのように見えたが、内側は満たされない葛藤のゆえに病んでいる姿が読み取れる。だから、人目を避けて夜に主イエスを訪ねて来たのである。

このようなニコデモの姿から、私たちはいくつか解決方法を見出せる。

一つ、内的な状態を感じ取る「敏感性」が必要だ。外なる姿と内なる心の不一致を自ら『感知する内的敏感性』が必要だ。仮面憂鬱は、外側の自分——他の人々が期待する自身の姿——が、本当の自分であるかのように錯覚するときに入るストレスの症状だ。外から見える自分が本当の自身ではないという事実を知り、内なる自分は本当に辛くて苦しんでいると悟る敏感性がなければならない。



*これが知りたい | シン・ソンジョン 牧師、<クリスチャン文学の木> 編集者

ヨハネによる福音書 15 章で、 主はなぜご自身をぶどうの木に たとえられただろうか？



聖書には光と塩、岩はもちろんのこと、ぶどう、小麦、大麦、いちじく、ざくろ、オリーブ、なつめやしななど、七つのおもな植物が隠喩として使われている。その中でも、ぶどうの木は乳と蜜の流れる祝福のカナンの地を意味することもあり、幸福と豊かさの象徴として使われたりもした。それだけでなく、神に選ばれたイスラエル民族と、主ご自身を意味する隠喩としても使われている。その代表的なのが、ヨハネによる福音書 15 章に書かれた「ぶどうの木の比喩」である。

旧約をみると、ぶどうの木は神の慈悲の象徴として用いられている。「あなたのぶどう畠の実を取りつくしてはならない。またあなたのぶどう畠に落ちた実を拾ってはならない。貧しい者と寄留者とのために、これを残しておかなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。」(レビ 19:10)

古代メソポタミアでは、ぶどうの木は「生命の草」として考えられていた。ゆえに、シュメール地域では文字が創られる前に、生命を現わす文字としてぶどうの葉の形が使われていた。そういう伝統の中で、ユダヤ人たちは神の慈悲の象徴としてぶどうを考えていたのである。(申命記 8:8 ~ 10)

聖書をみると、洪水の審判後に人類が初めて栽培した植物はぶどうの木であった、と記されている。「さてノアは農夫となり、ぶどう畠をつくり始めた」(創世記 9:9)

二つ、イエス様に自身のこのような状態をありのまま見せられる勇氣が必要だ。ニコデモは、自身の内的葛藤をそのまま主に見せたのである。外に現われる完璧で大丈夫な姿が本当の自分ではないということを認め、自身の中の葛藤している醜い姿をありのままに示さなければならない。そうすると、主は私を慰めてくださるのである。今まで隠して生きてきたために疲れ果てた私を癒される、主の御手を経験するようになる。

最後に、神にあって私は誰なのか、本当の自分のアイデンティティを再発見する作業が必要だ。人々が見つめている自分や、人々が期待する自分が本当の自分ではなく、神が見つめておられる自分、主が尊く思ってくださる自分が真の自分であるという認識を確立するとき、ようやく私たちは仮面憂鬱から自由になれるのである。

弱い私たちは、自分の短所や過ちを同僚に、自分の配偶者に打ち明ける勇氣が必要だ。私たちは、他人に表せない自分の弱さを、主の御前で表すことができる。その主が共におられるということ、これこそが至高の幸せではないだろうか？ †

イスラエルの気候は4月から9月は乾季で、10月から3月は雨季だ。ところが乾季の時の蓄えた水がなくなる寸前にぶどうを収穫し、「喝を免れる喜び」を味わってくれるのがすなわち、ぶどう酒であった。だから詩篇のあらゆる箇所で、イスラエル民族が楽しく歌う贊美には、ぶどうの収穫がともに出てくる。

ぶどうは大きく三つの靈的意味を持つ。一つは、キリストの最初のしるしであるカナの婚礼式におけるぶどう酒は、『救い(渴きの解消)』の喜びを意味する。二つ、最後の晚餐におけるぶどう酒は、『救いの完成』を意味するものである。三つ、ヨハネによる福音書15章における「ぶどうの木の比喩」から見られるように、ぶどうの木はイエス・キリストご自身を、その枝は弟子たちを意味しており、その関係の密接性を表現してくれる。

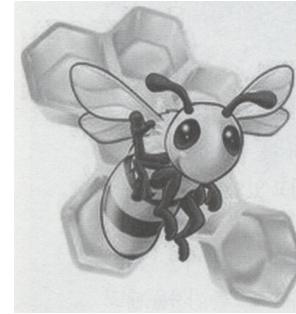
他の国では、ぶどうの木はつる性のゆえに、ぶどうの木は別の木に絡ませて倒れないようして育てている。だからカナンからぶどうを持って来る時、ぶどう一房が付いた枝を切り取り、ふたりで担いで来るほどだった。これは、カナンの地の肥沃さを表現したものである。しかし多くの人は、カナンのぶどうの実が、今は見られないほど大きかったはずだと考えているが、これは誤った考え方である。ぶどうは木に絡ませて育てるのが一般的だが、雨の少ないイスラエルでは、毎日降りる夜露を代わりとして利用していた。だから今でも地面をはって伸びていくようにして育てている。より多くの夜露を活用したいからである。それゆえに12部族の斥候がカナンの地でぶどうを持ち帰る時、ぶどうのつるを二つの棒に絡ませて担いで来たのである。

ここで重要なことは、聖書におけるぶどうの木とは、前述したように、少なくとも三つ以上の意味があるということを覚え、その情況に応じて解析するのが正しい方法である。†

＊光として塩としてー | アン・ヒファン 牧師

イエスジビョン教会、キリスト教シンクタンク代表

破壊し続ける存在ではなく、保護する存在であること



中国北京では、今年はスモッグ（大気汚染）との戦争に190億人民元（3兆2024億ウォン）を投じなければならぬといわれています。昨年に比べて5億9千万人民元（994億ウォン）ものお金がかかります。石炭の消費をグリーンエネルギーへの代替、老朽化した車の廃棄、汚染物を排出する工場の管理などに様々なところに相当なお金が必要です。昨年、一年間に廃棄された老朽車両だけでも50万台、大変な努力をしていることがわかります。北京がこのように懸命に努力しているのは、都市部のスモッグ現象は殺人的だからです。マスクをして歩くのは当たり前で、スモッグが特に深刻な北京では、膨大な予算を費やす政策の実施はやむを得ないことでしょう。

問題は、そのような北京の政策が韓国には何も役に立たないということです。直接的に韓国に影響を与えていた遼寧省（りょうねいしょう）、吉林省、山東省、河北省、河南省、陝西省などには、北京から多くの工場が移転し、韓国のスモッグはますます深刻になっています。

実際に北京では、スモッグ対策に効果が出ていると報告されているにもかかわらず、韓国のPM2.5の発生が頻繁になっています。ソウルだけではなく、郊外でもPM2.5で覆われ、PM2.5

の警報が毎日出る程です。ネット上では、中国からの PM2.5 への対策を立てるべきだという書き込みがあふれています。韓国の PM2.5 問題は、中国と密接に関連しているのです。

カザフスタンで「黒い雪」、国連のミツバチに対する警告

今年 1 月、中央アジアのカザフスタン中部テミルタウという地域で白い雪ではなく、黒い雪が降ったというニュースがありました。実際に降ってきたものは雪ではなく、工場からの汚染物質でした。生態学者と政府専門家たちによる特別委員会が黒い雪の原因を調査した結果、カザフスタン最大の鉄鋼工場であるカラガンダ・メタルルジコル・コンバインが黒い雪の原因だとわかりました。

住民たちは憤っています。黒い雪が降るということは、この地域が深刻な公害にさらされているのです。そのような有害な物質が子供たちの肺に入るということです。事実、黒い雪が降る前にもその地域は公害地域として知られていました。2016 年の 1 年間に 60 万近い有害物質が排出され、2017 年 12 月、気象庁はテミルタウの空気中の硫化水素濃度が国の基準値の 11 倍を超過したと発表しました。自然を破壊するのは、人間自らを壊していることです。

何故、このことが国際的な問題になるかと思う事例もあります。地球から、ミツバチがどんどん減っているという現象です。アメリカやヨーロッパでは、蜂の巣の崩壊現象が相次いで起きています。アメリカの場合、蜂の巣の崩壊現象が 2006 年頃から本格化したようです。その後、蜂の巣の崩壊現象はヨーロッパにまで広がりました。2010 年に国連が、ミツバチの減少に警戒心を持つべきだと報告しています。その理由は、ミツバチには、自然環境を守る大切な役割があるからです。ミツバチは花の蜜を 1kg 集めるた

めに、地球一周に当たる約四万 km もの距離を移動します。その時、ハチの毛に付く花粉によって、植物の交配し果実を結びます。全世界で生産される農作物が実を結ぶためには、ミツバチが不可欠です。農業のミツバチへの依存度はとても高いといえます。国連食糧農業機関 (FAO) は全世界の農産物の生産量に対するミツバチへの貢献度は 71% に迫ると報告しています。リンゴ、タマネギ、ニンジンでは 90%、アーモンドの場合 100% といわれています。

蜂の巣の崩壊現象はまだ正確にわかっていないが、2 つの仮説が提起されています。一つは残留農薬がミツバチの方向感覚に悪影響を与えていたという説、もう一つは、気候変化の影響を受けたということです。地球の環境が以前と比べて汚染されて破壊されたのが主な原因としても間違っていないのです。

今は、このほかにも地球環境を破壊するものにあふれる時代です。照明で明るくなった地球の夜も生態系に悪い影響を与えています。夜行性昆虫による花粉の移動が減り、受粉率の低下が農作物の収量にも影響する可能性があるという研究報告もあります。クリストファー・カイバ (ドイツ ポツダム研究所) は、明るい夜が生態系に大きな変化をもたらす結果、人類は多くの費用を支払ことになるだろうと警告しています。

海洋汚染も深刻なレベルです。英国の新聞デイリーメールは、紅海の海中で首にビニール袋が巻きつき、喉にもビニルパックがひっかかったまま泳いでいる亀の画像を報道しました。ビニールパックを餌だと勘違いして食べてしまったようです。海の中はプラスチックだらけです。国連環境計画 (UNEP) は 2010 年の 1 年間だけでも、480 万～1270 万トンのプラスチックが海に流れ込んだと報告しています。プラスチックの微細粒子は生態系を搅乱させ、海産物を食べる人間の体内にまで入ってきます。

聖書は何を伝えているか？

神様は人を創造してアダムに「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」（創世記 1:28 新改訳）と言われました。ここで「支配せよ」とは、汚染し破壊するという意味ではなく、よく管理して保護するということです。「支配せよ」という言葉を使った他の箇所をみると、その意味が明確にわかります。夫が妻を治めると言ったとき（創世記 3:16）、それが破壊の意味ではないはずです。自分の心を治めると言ったとき（箴言 16:32）、それが自分を破壊することではないはずです。御父が御子にすべての人を治める権威をお与えになられたと言ったとき（ヨハネ 17:2）、これが万物を破壊することではないはずです。むしろ、よく管理するという意味のはずです。

教会は、神様がこの世に残した神の代理人です。代理人らしく靈・魂・肉を守り、保護して管理するという役割を常に心に留めていかなくてはなりません。せめて、神様を信じているクリスチヤンなら、この地上に生きていくうえで、私たちを周りの環境を汚染し破壊するのではなく、よく管理し保護していく役割を果たさなければなりません。

水を節約すること、できる限り使い捨て商品を使わないこと、シャンプーや洗剤など化学物質の使用量を最小化すること、電気使用量を減らすこと、紙のリサイクルすることなど、小さなことが行動が必要です。大切なことは、クリスチヤンの政治家たちが環境を守り回復させる政策を示し、クリスチヤンの経済学者たちが環境汚染を改善する経済活動の必要性を伝えるべきです。人間が壊した環境が人間を壊すことは明らかです。それを、見過ごしてはいけないです。†

＊愛 | イ・ジュンソク 宣教師（日本）／賛美使役者



花も風も雲も 主を賛美します

イ・ジュンソク宣教師は、シャーマン家庭で生まれ育ち、神様を知らないまま生きていたが、二十歳頃に教会に行くようになった。以来、神の恵みによって救いを受け、神様だけを賛美する働き人となった。家庭での信仰的葛藤を残したまま日本に渡り、宣教訓練を受けて宣教師として活動している。韓国と日本、アメリカなど、招待されればどこでも駆け付けて、音楽をとおして神の愛を伝えている。2005年には第16回CBS創作福音成果競演大会で金賞を受賞し、現在、アワードリーム賛美宣教会（代表ジョン・ヨンデュ牧師）の音楽幹事、アルタイ宣教会（代表ユ・ギナム宣教師）の日本宣教師、またNCM² choirリーダーボーカルとして仕えている。

イ・ジュンソク宣教師のブログに入ると、彼の日本語で歌った賛美を聞くことができる。その中で最近、日本の教会で広く知られている有名な曲がある。「花も」という曲だ。「花も 風も 雲も 大海も 奏でよ イエスを」という内容が入っている。暖かい歌詞と心を動かす訴え力のある彼の唱法が、印象的な曲だ。すでにユーチュブクリック数が40万回を超える人気ぶりである。

「10年前に初めて日本に来たとき、宣教師大会で宣教師の子どもたちのためのキャンプがありました。その時スタッフとして奉仕しましたが、そこで初めてこの贊美に接しました。知られた曲ではありませんけれども、私は感動して熱心に歌うようになり、日本語アルバムにも収録しました。今回発表する韓国語3集アルバムのタイトル曲でもあります。」

李（イ）宣教師はシャーマン家庭で生まれ育った。彼の祖母は有名な巫女であった。彼が4歳のときに亡くなつたので、祖母に対する記憶は薄いという。彼は、ふつうに学生生活を送っていた。ところが、中学3年の時から母の体が病み始めた。多くの病院で診察を受けても原因がわからなかつた。占い師に通つていた母の友人が巫女の所に連れて行つた。

「巫女が母に靈の病だと言われ、巫女になる靈を受けなければ、それが娘にのり移るか、でなければあなたは死ぬと言われたそうです。結局、母は山に入りました。祖母のその靈が嫁に降りて受け継ぐことになったのです。母が山に入って巫女になるための修練を受けている間、家には父と私、そして妹で生活していました。」

母のいない寂しい学生時代を送る間、彼は高校のときに重唱団とバンド活動をすることで寂しさをまぎらせながら、音楽的才能があることを発見した。音大に進学することを夢見ていたが、建築の設計をする父の事業が倒産し、学費が払えず生活前線に飛び込むしかなかつた。しかし彼は、音楽に対する熱情だけは諦めることができなかつた。

彼は重唱団で活動する先輩に、音楽を指導してくださる方を紹介してほしいと頼んだ。すると先輩は、二人の方を推薦して

くれた。その方たちに音楽理論とボーカル、楽器、作曲方法など、様々な音楽的技法を学んだ。幸いにも、二人ともクリスチャンだった。

「二人の先生は、信仰と人性が優れた方でした。だから私も、先生と一緒に教会に出席するようになったのです。高校の時、重唱団活動をしながら、『教会文化の夜』の行事に多く参加したこともある、贊美曲には慣れていました。教会で贊美チームとして奉仕しながら、神様について知るようになりました。」

彼は、予備軍として通勤しながら軍隊生活を送りましたが、その間も教会奉仕に熱心であった。使役者として仕えるようになってからは、家の中でも信仰のカラーをより明確に表した。その時から母との葛藤が始まった。

「家によくないことが起つりました。母の占いが当たらなくなり、何ともなかつたテレビが爆発し、家が火事になりました。父の事業も上手くいかず、ジャズダンスで大学に通う妹は、前十字鞄の断裂で夢を諦めました。これらのことすべての原因が、私に降りかかりました。私がイエスを信じるから、家に悪いことばかりが起るのだと言い、母は私にイエスを捨てるか家を出るか選択しなさいと言いました。」

イ宣教師は、家を出る前に、母親に福音を伝えた。

「より強く伝えなければと思い、『母さん、イエス様を信じれば、辛い巫女の人生を生きなくても大丈夫です。もうやめて、イエス様を信じて平安に暮らしてください』と言いました。すると、母の目が揺れ動きました。母も辛かったのです。しかし、突然部屋に入って祈り、再び出てきた母は、『あなたがイエスというおかしい存在を頼つてそういうことを言つていいようだが、あなたとは一緒に暮らせない。もう家から出て行きなさい』と言

われました。結局、私は家を出るしかありませんでした。」

彼は、スタジオ録音室に就職した。友人の家と教会、チムジルバン（24時間サウナ）が彼の寝床だった。2003年頃、韓国を代表する福音聖歌歌手、ジョン・ヨンデ牧師に出会った。ジョン牧師は当時、未来が不透明だった青年イ・ジュンソクに、父親のように支えてくださった。ジョン牧師と共に宣教活動をしながら、青年イ・ジュンソクは一段とより発展することができた。そんな中、日本で宣教師訓練を受けていた先輩が、青年イ・ジュンソクに日本での宣教訓練を提議した。

「2007年頃、日本福音宣教会から、一緒に宣教訓練を受けないか、という提案がありました。日本行きは、私の人生において最も大きな転換期となりました。当時、親との葛藤のゆえに、信仰生活が自由にできる所ならどこでも行きたい、と思っていたときでした。私はすぐにアルバイトを始め、お金を貯めて日本へ渡りました。」

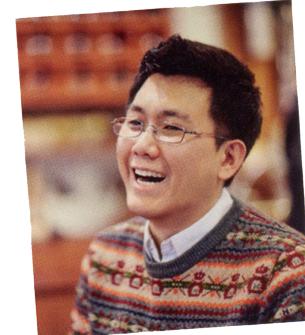
彼は韓国で3か月間訓練を受けながら、当時宣教会幹事だった姉妹と交際するようになった。そして訓練を終えて、3年後に結婚した。日本での宣教訓練は、彼にとって神様を深く知る尊い時間となった。早朝はデボーションをもって一日を始め、午前には語学院で勉強し、午後は御言葉を勉強し、週末には宣教師たちを助ける働きをした。

「日本では、神様は私に驚くべき出会いの祝福を与えてくださいました。アメリカLAに本部のある日系アメリカ人贊美チーム、NCM² クワイアに出会わせてくださいました。このチームは、日本全国を年に1,2回巡回し、日本福音化のために励んでいる方たちです。この方たちと連携して日本全国を回り、宣教活動をしています。アメリカの日本の教会や韓国の教会を訪問し、本

格的に贊美をもって宣教できる道が開くようになりました。」

2012年から日本で本格的に宣教活動を開始した彼は、現在、多くの日本の教会から招かれる使役者として成長した。今まで、個人的に出した音盤と、NCM² クワイアとともに出したアルバムは8個で、日本とアメリカにおける地境が広がりつつある。3月には韓国語3集アルバムを発表し、アメリカのダラスセミハン教会でコンサートを開く予定だ。

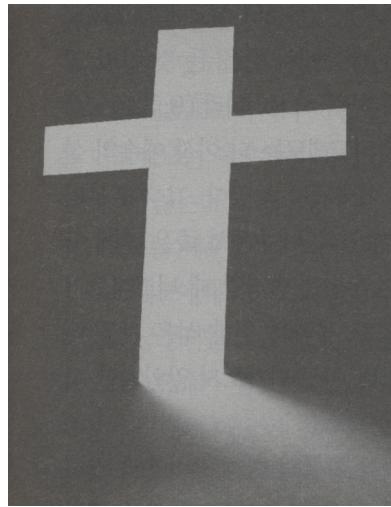
「今まで私を助けてくださった方々がおります。その方たちがいなかつたら、今の私はいなかつたはずです。その方々に心から感謝の言葉を伝えたいです。個人的な祈りの課題は、やはり家族の救いです。父と母、妹、そして義理の父がまだ主を受け入れていません。20年近く、家族の救いのために祈っていますが、いつしか巫女である母も、神様を贊美するその日が来ると信じて祈っています。そして神様は、今、日本に福音の門を開いてくださっています。クリスチヤンの人口が1%しかない日本の教会がリバイバルし、世界に向かって出て行けるよう、お祈りください。」†



＊かつての道、すなわち正しい道を捜し求めて――

ソン・ヒョンギョン 牧師 アメリカ・ゴスペル・フェロウシップ教会

悔い改めのない信仰は 恵みがない



今日、救いのための伝道の言葉は、「イエス・キリストを信じてください」だ。さらに、「イエス様を信じれば良いことがあります、幸福になります」と伝える。これは福音の結果である。

パウロがピリオド看守に伝えた言葉、――「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。」(使徒16:31)――この内容が代表的だ。

しかしその御言葉の前にある、監獄の門が開いたことを知った看守が自殺しようとしたときに、パウロが彼を牢の中で待っていた事を知り、その看守は、「あかりを手に入れた上、獄に駆け込んで、おののきながらパウロとシラスの前にひれ伏し

た」(使徒16:29)という事実が見過ごされている。看守は自決しようとするほどに死を恐れたのではなく、主なる神を恐れていたのである。これが悔い改めだ。

信じるだけで救われるという伝道に関する見解として、より知られた箇所がある。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ3:16)である。ところが、ヨハネがそのように解説する前の節では、世間の人たちにも同時に紹介されているのではない。ヨハネによる福音書3章16節には、イエス様が、夜中に訪ねて来たユダヤ人の指導者ニコデモに、最後に語られた御言葉を、ヨハネがリメークしたものである。

まず、ニコデモは、主イエスのことをラビと尊称しながら、神から来られた教師であると、肯定的に認める。それなのに、主は「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。」(ヨハネ3:3)と、否定的に返答される。この対話は、結局否定的に終わる。「わたしが地上のことを語っているのに、あなたがたが信じないならば、天上のことを語った場合、どうしてそれを信じるだろうか。」(ヨハネ3:16)と、主は信仰のないことを指摘される。

そして継いで語られた主の説教に、ニコデモはそれ以上反応しなかったのである。その最後の御言葉は、「モーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3:14～15)であった。神から来られた教師だと告白したニコデモは、もはや主の説教に反応しなくなつたのである。正

確にいえば、その反応については記録がない。

彼はそれ以来、主イエスが十字架に架かって死なれるまで、再び会うことはなかった。イエス様が死なれた後、アリマタヤ・ヨセフがピラトに、主イエスのご遺体を取り下ろしたいと要請して自分の墓に納めるとき、ニコデモが現われた。「また、前に、夜、イエスのみもとに行ったニコデモも、没薬と沈香とをませたものを百斤ほど持ってきた。」(ヨハネ 19:39)。イエス様が生きておられるときには再び近寄ることはなかったが、十字架で死なれた主に仕えるために来たことになる。

「彼らは、イエスの死体を取りおろし、ユダヤ人の埋葬の習慣にしたがって、香料を入れて亜麻布で巻いた。」(ヨハネ 19:40)
——しかしこれも役に立たなかつたかもしれない。アリマタヤ・ヨセフとニコデモが、主イエスのご遺体に香料をふりかけて埋葬をしたけれども、すでに死なれる前に高価な香油が注がれ、葬儀が準備されていた。

「ひとりの女が、高価な香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、イエスに近寄り、食事の席についておられたイエスの頭に香油を注ぎかけた。」(マタイ 26:7)——この時、「この女がわたしのからだにこの香油を注いだのは、わたしの葬りの用意をするためである。」(マタイ 26:12)と、主は言われた。名前も記録されていない献身的で謙遜なこの女性が、主の死を知り高価な香油をもって主イエスの葬儀を準備したのである。

ニコデモは、神から来られた教師だと自分自ら認めながら、なぜ主の御言葉を受けとめることができなかつたのだろうか？

これが重要である。彼は、神から来られた先生である信じていた方と対話しているうちに、その説教のゆえにかえって信じることができなくなっていたのである。

今日も、誰もが素早く簡単に、さらに直ちに救いに至らせようと、ヨハネの福音書3章16節の御言葉を紹介しているが、使徒ヨハネは、ニコデモがこの御言葉をなぜ受けとめることができなかつたか、その理由を先に記録したのである。また、バプテスマを受けて40年になろうとしているのに、今になってようやくこのストーリー全体を理解するようになり、こうして長々と説明し理解を求めようとする私の痛々しい、心苦しい理由でもある。

まずニコデモは、30代初期の若い主イエスをラビと呼びながら、主イエスと共に神がおられることや神から来られた教師であると、すでに信じ告白しつつ好意をもって訪ねて来た。しかし主は「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。」(ヨハネ 3:5)と、まず理解できない否定的な言葉で迎え入れられる。

次は、イスラエルの教師がこういうこと——新しく生まれること——もわからないのかと、あまり嬉しくない話をされる(ヨハネ 3:10)。ニコデモは主イエスに、あなたは神から来られた『教師』であると尊重して言ったのに、主は「あなたはイスラエルの『教師』でありながら、これぐらいのことがわからないのか」と当惑するご返事をされたのである。

なおも主は、「わたしが地上のことを語っているのに、あなたがたが信じないならば、天上のことを語った場合、どうしてそ

れを信じるだろうか。」（ヨハネ 3:12）と言われた。

これは説明ではなく、攻撃であり礼儀のない咎めである。さらに深刻なことは、ニコデモは主イエスが神から遣わされた方だと信じて訪ねてきたのに、主はニコデモが『信じていない』と判断される。結局、イエス様が最後に語られた言葉のゆえに、決定的にニコデモは主を拒むようになる。

ニコデモに語られた最後の御言葉は、「彼を信じる者が、すべて永遠の命を得る」であるが、その晩に聞いた唯一の肯定的な御言葉であった。ここでイエス様がご自身を3人称に表現された『彼』が問題だった。この彼とは、モーセが蛇を上げたように、『竿に架けられた人の子』だ。ニコデモのつまずきは、「なぜ自分が竿に架けられた人の子を信じなければならないのか」である。自分はすでに主なる神を信じてきたし、イエス様が行なわれた奇跡も目撃したので、これは神が共におられるしるしだと思って信じることができた。だから、夜にイエス様を訪ねてきて、「先生、わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています。神がご一緒でないなら、あなたがなさっておられるようなしるしは、だれにもできはしません」（ヨハネ 3:2）と信仰告白をしたのである。

イエス様は、ニコデモがすでに知っているモーセが火の蛇を竿に掛けるようになった民数記の出来事を言わされたのである。エジプトから荒野に出てきた人々は、道が険しいと神に恨みつぶやいたために、神は怒られて火の蛇を送られた。「そこで主は、火のへびを民のうちに送られた。へびは民をかんだので、イスラエルの民のうち、多くのものが死んだ。」（民数記 21:6）

この時、イスラエルの民は、神が送られた火の蛇に人々が噛まれて死ぬのを見ながら、罪を犯したことを告白するようになった。すると神は、「火のへびを造って、それをさおの上に掛けなさい。すべてのかまれた者が仰いで、それを見るならば生きるであろう。」と仰せられた。イエス様は、これをニコデモにパロディーされたことになる（ヨハネ 3:14～15）。つまり、「ニコデモ、あなたは蛇に噛まれている。だから竿に上げられた人の子を仰ぎ見、彼を信じなければならないのだ。」ユダヤ人の指導者であり教師であったニコデモは、これを受け入れることができなかつたのである。これは、自分が蛇に噛まれ、パウロが表現したように「罪過と罪とによって死んでいた状態」（エペソ 2:1）であり、カルヴァインが述べたように、「全的な墮落」（Total Depravity）の状態だと言われたのである。

すでに神に仕えるユダヤ人の教師でありながら、イエス・キリストに対する信仰も持っているニコデモは、悔い改めなさいというメッセージを理解することができなかつたのである。

悔い改めなしに信仰を得ることは不可能だ。悔い改めのない信仰は、結局、イエス・キリストを捨てるしかない。ニコデモのように。死ぬまで従うと言っていたペテロのように。ヨハネによる福音書3章16節の御言葉は、悔い改めない人たちのものではない。†

愛する者よ。

あなたのたましいが
いつも恵まれていると同じく、
あなたがすべてのことにも恵まれ、
またすこやかであるようにと、
わたしは祈っている。

(三ヨハネ一・二)

発行：純福音東京教会・出版部

【翻訳】：李カレン 執事、林俊秀教育生、間杉綾乃 サモ、李珍 執事、山野永理 勘士、

趙芝賢 伝道師、澤田義則 執事、朴宰完 按手執事、金澤由紀子 勘士

【日本語校正】：松谷恵理 執事、間杉綾乃サモ、吉田綾子 執事、笠原幸子 執事、武石みどり 執事、

向川誉 執事、澤田義則 執事

【印刷・製本】：間杉典生 按手執事

【再編集】：金澤由紀子 勘士
